



Title	明治期往来物の依頼表現：「～べく候」の衰退をめぐって
Author(s)	小椋, 秀樹
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 47-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68976
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

明治期往来物の依頼表現

——「くべく候」の衰退をめぐって——

はじめに

本稿は、小椋（一九九八）に続き、明治期往来物の書簡文研究資料としての性格を検討しようとするものである。

明治期の候文体書簡文を研究していくにあたって、明治期往来物は、ひじょうに有用な資料であるが、その資料的な性格はじゅうぶんに明らかにされているとはいえない。⁽¹⁾したがって、明治期往来物の語い、文字表記などを調べ、言語の面から資料的な性格について見通していくことが必要である。

そこで、本稿では、候文体書簡文の定型表現のひとつである「くべく候」のうち、相手への依頼をあらわす「くべく候」をとりあげ、明治期往来物における使用実態を明らかにするとともに、その結果から各往来物の資料的な性格について考えることとする。

一 目的・資料・方法

一・一 目的

候文体書簡文は、中世から近世にかけて表現が固定化し、「一筆啓上仕候」「恐惶謹言」などの頭語・結語をはじめ、さまざまな定型表

現が見られるようになった。今回、とりあげる「くべく候」もその定型表現のひとつである。「くべく候」について、『日本国語大辞典』には、

べくそうろう 「べし」の意を丁寧を表わす。自分自身の意志、

または相手への依頼をあらわすことが多い。中世以降、書簡体に多く用いられた。

とある。「くべく候」は、中世以降、書簡文に多用されることによって、近世期には候文体書簡文の定型表現となっていたのである。

ところで、近世期の候文体書簡文に多く用いられた定型表現も、明治期になると、しだいに用いられなくなる。頭語・結語について言えば、「一筆啓上仕候」や「恐惶謹言」⁽²⁾は、明治後期には衰退し、「拝啓」「敬具」が一般化した。このように、明治期には近世期と異なる新しい候文体書簡文が形作られているのである。

したがって、これら定型表現を候文体書簡文のキーワードとしてとりあげ、明治期往来物における使用実態を調査していくことで、明治期における候文体書簡文のありようを明らかにすることができる。さらに、その結果から、各往来物の資料的な性格について見通しをえることも可能である。なぜなら、近世期往来物に見られるよ

小 椋 秀 樹

表1—1

書名(内題)	編著者	刊年
文林節用筆海往来	山本序周撰	享保6(一二二)
安永用文章	不 明	安永4(二七五)
筆林用文章指南車	重田一九撰	文政元(二八一)
注釈用文章	藤村秀賀注	慶応元(二八六)

うな定型表現を多用する明治期往来物は、近世以来の規範を忠実に受けついだものと考えられるし、反対に、そのような定型表現を用いないものは、近世期とは異なる新しい候文体書簡文を収めたもので、明治期なりの新しい意識のもとに編さんされたものと考えられるからである。

明治期においても、往来物は、近世期と同様に数多く刊行されており、すべての往来物を調査することは容易なことではない。各往来物の資料的な性格を明らかにしたうえで、必要なものを適切にとりあげることができればよい。明治期の候文体書簡文の特色を明らかにしようとするものにとっては、より新しい形の候文体書簡文を収めている往来物の目安を付けることが必要なのである。

このようなことから、本稿では、候文体書簡文の定型表現のうち依頼をあらわす「くべく候」をとりあげ、その使用実態を調査して、明治期における候文体書簡文のありようの一端を明らかにするとともに、明治期の候文体書簡文を研究するには、どのような往来物を調査すればよいのかについて見通しをえたいと考えている。

一・二 資料

今回調査した資料は、表1—1から表1—3にあげた二四点である。⁽³⁾

表1—1にあげた近世期の往来物、表1—3にあげた大正期の往来物は、明治期の前後の時代において、「くべく候」がどのように用いられていたのかを見るためにとりあげた。近世期、大正期の往来物における「くべく候」の使用実態をある程度見通すことができれば、明治期往来物における「くべく候」の使用の特色を考える際の

参考になる。

表1—2にあげた明治期往来物は、小椋(一九九八)において、重点的に調査していくべきものとした資料である。これらは、「拝啓」「謹啓」「敬具」などの現代一般的で頭語・結語を多く用いており、近世期のものとは異なる新しい形式の候文体書簡文を収録していると考えられるものである。

表1—2、1—3の一段目には、A、B、Cの三種の記号を付した。これは、次に示すように往来物の装丁と書体とを基準にして分類したものである。⁽⁴⁾

A類 和装本 草書体

B類 洋装本 楷書体、行書体(活字で連綿体ではない)

C類 洋装本 楷書体(活字)

本稿は、定型表現「くべく候」の使用実態から往来物の性格を考えようとするものである。しかし、往来物の性格を考えるには、書誌的な事項も無視することはできない。というよりも、往来物の装丁や書体などは、その往来物に用いられることばと無縁ではない。⁽⁵⁾以下、往来物の性格を考える際には、右の分類をふまえたうえで考察を進めることとする。

表1—2

分類	書名(内題)	編著者	刊年	装丁	書体	所蔵
A	漢語文章大全	大月暁四郎	明5	和装	草書	小
A	漢語普通作文必携	檜崎隆存	明11	和装	草書	小
A	開化普通用文章	岡本權丞	明14	和装	草書	小
A	帝國新用文大成	福井 淳	明23	和装	草書	前
A	明治作文三千題(下巻)	伊良子晴州	明24	和装	草書	小
B	初作文独稽古	篠田秋野	明28	和装	楷書	前
B	新撰注解用文	佐藤 勉	明29	洋装	行書	前
B	帝國新用作文	清水善博	明30	洋装	楷書	小
B	美益新用文	沢田寛勉	明32	和装	行書	小
B	郵信用文	伊沢孝夫	明32	和装	行書	小
B	高等作文独習	野村銀次郎	明36	和装	行書	前
B	有益新用文	鈴木与八	明39	洋装	行書	小
B	日本用文章	藤原桜雌	明41	洋装	楷書	小
B	尋常卒業後実用作文	大畑 裕	明42	洋装	楷書	大
C	新書翰文作法	泉豊春ほか	明44	洋装	楷書	大
C	新書翰文大成	内海弘蔵	明44	洋装	楷書	大
C	男子紙講習録	斯華会出版部	明45	洋装	楷書	大
C	書翰文大全	野田千太郎	明45	洋装	楷書	大

表1—3

分類	書名(内題)	編著者	刊年	装丁	書体	所蔵
C	書翰文講話及文範	芳賀矢一ほか	大2	洋装	楷書	小
B	新式大正書翰文	翠園生	大4	洋装	楷書	前

※ 前…前田富藏蔵 小…小椋秀樹蔵 大…大阪府立中央図書館蔵

一・三 方法

今回の調査の目的は、一・一で述べたように、次のふたつである。

- ① 相手への依頼を表す「くべく候」の明治期往来物における使用実態を明らかにする。

- ② ①の結果をもとに各往来物の性格を検討し、明治期の候文体書簡文を研究する際に調査すべき資料の見通しをつける。

これらを明らかにするため、次のような方法で考察を行う。

まず、①については、用例数およびどのような語が「くべく候」に上接するの点から明らかにしていく。②については、①の調査結果をもとに、今回調査した各往来物の資料的な性格について見通しを立て、小椋(一九九八)で述べたことを検証する。

二 近世期往来物の「くべく候」

近世期往来物における「くべく候」の使用状況を見ることとする。近世期往来物における「くべく候」の用例数を表2に示した。

表2を見ると、すべての資料で「くべく候」が用いられている。

『日本国語大辞典』には「中世以降、書簡体に多く用いられた」とあったが、その記述を往来物の調査で確認したことになる。用例を見ると、

折節隙に居申候。乍三御慰一此方御出可レ被レ遊候

(『文林節用筆海往来』286p)

乍三御六借一御請取置可レ被レ下候。(『文林節用筆海往来』286p)

来陽目出度可レ得三御意一候。折角御仕舞可レ被レ成候

(『筆林用文章指南車』13ウ)

などがある。右の例を見ると、「くべく候」の上接語には、「あそば

表 2

	くべく候
文林節用筆海往来（享保6）	60
安永用文章（安永4）	6
筆林用文章指南車（文政元）	10
注釈用文章（慶応元）	8

表 3

	あそばさる	くださる	たまふ	なさる	る（らる）
文林節用筆海往来（享保6）	1	45		9	5
安永用文章（安永4）		4	1		1
筆林用文章指南車（文政元）		9		1	
注釈用文章（慶応元）	1	6			1

す」「くださる」など、いくつかの種類がある。そこで、表2に示した「くべく候」の用例数を「あそばさる」などの上接語ごとにまとめ、表3として示した。表3を見ると、上接語には「あそばさる」「くださる」「たまふ」「なさる」「る（らる）」の五つがあり、それらのなかでも「くださる」の用例数がもっとも多いということが分かる。した

がって、近世期往来物では、たんに「くべく候」という形で定型表現となっていたとするよりも、「くくださるべく候」という形で定型表現となっていたとするほうが適切であると考えられる。

三 明治期往来物の「くべく候」

本節では、明治期往来物における「くべく候」の使用状況を見ていく。

今回調査した明治期往来物における「くべく候」の使用数を表4に一覧した。なお、明治期往来物には、

御来人之品ニ候ハ、宜しく御断可^レ被^レ下、則ち為^レ持差上候

（『普通作文必携』下・57オ）

のように「候」をともなわない例（挙例傍線部・以下「くべく」と呼ぶ）が見られる。表4では、その用例数を「くべく候」の用例数とは別にあげた。また、今回とりあげた大正期の往来物についても「くべく候」「くべく」の用例数を調べ、表4に示した。

表5には、前節と同様に「くべく候」の上接語とその用例数を示した。かつこ内の数字は「くべく」の上接語の用例数である。なお、表4と同様に大正期の往来物についても用例数を示した。

以下、明治期往来物における「くべく候」の使用実態を見ていくが、その際、『漢語文章大全』から『開化普通用文章』までを明治前期資料、『帝国新用文大成』から『帝国新体作文』までを明治中期資料、『実益新用文』以降を明治後期資料と呼ぶこととする。

三・一 明治前期・中期資料の「くべく候」

表4を見ると、いずれの資料でも「くべく候」が多く用いられて

表 4

		く へく 候	く へく
A	漢語文章大全 (5)	46	
A	普通作文必携 (11)	103	3
A	開化普通用文章 (14)	17	8
A	帝国新用文大成 (23)	28	6
A	明治作文三千題 (24)	28	
B	作文独稽古 (28)	18	
B	新撰注解用文 (29)	30	
B	帝国新体作文 (30)	21	
B	実益新用文 (32)	16	
B	郵信用文 (32)	6	1
B	高等作文独習 (36)	1	
B	有益新用文 (39)	12	
B	日本用文章 (41)	153	1
B	尋常卒業後実用作文 (42)	9	16
C	書翰文作法 (44)	1	1
C	書翰大成 (44)	2	
C	手紙講習録 (45)		1
C	書翰文大全 (45)	2	1
C	書翰文講話及文範 (大元)	9	3
B	大正書翰文 (大4)	2	1

いる。用例数から見たばあい、この時期の往来物は、近世の規範をかなり忠実に受けついだものと考えられる。次に、表5を見ると、「くへく候」の上接語には「あそばさる」「くださる」「これある」「なさる」「る(らる)」の五つがあり、とくに「くださる」の用例数がどの資料でもっとも多い。「くへく候」は、

乍「御煩勞」御教示可レ被レ下候(『漢語文章大全』上・6ウ)

松魚二連拝賀之印まで二呈上仕候幾久敷御受納可レ被レ下候

(『帝国新用文大成』7オ)

矮居無レ障消光致居候間御休神可レ被レ下候

(『作文独稽古』3ペ)

などがある。「くへく候」は、近世期往来物において、もっとも多く用いられていた依頼表現である。さらに、用例数から、明

表 5

		あ そ ば さ る	く だ さ る	こ れ あ る	な さ る	る (ら る)
A	漢語文章大全 (5)		40		6	
A	普通作文必携 (11)		93(3)	5	4	1
A	開化普通用文章 (14)		13(5)		2(2)	2(1)
A	帝国新用文大成 (23)	1(1)	25(5)		2	
A	明治作文三千題 (24)		24(2)		4	
B	作文独稽古 (28)		15		3	
B	新撰注解用文 (29)	1	29			
B	帝国新体作文 (30)		20		1	
B	実益新用文 (32)		13		3	
B	郵信用文 (32)		4		2(1)	
B	高等作文独習 (36)		1			
B	有益新用文 (39)		12			
B	日本用文章 (41)		145(1)		4	4
B	尋常卒業後実用作文 (42)		8(16)	1		
C	書翰文作法 (44)		1(1)			
C	書翰大成 (44)				2	
C	手紙講習録 (45)	(1)				
C	書翰文大全 (45)		(1)			
C	書翰文講話及文範 (大元)		9(2)	(1)		
B	大正書翰文 (大4)		2			(1)

治前期・中期の往来物は、近世期の規範をかなり忠実に受けついだものと考えられると述べたが、上接語に目をむけたばあいも、同様の傾向を見ることができ。

ところで、この時期の資料には、

御双身共時候御厭可レ被レ成、先八御寧否相伺申上度、如レ斯ニ御座候
(『開化普通用文章』87ウ)

野生無^レ恙帰国仕候間^レ憚御安神可^レ被^レ下、不在中ハ何角と
御世話相成奉^二千謝^一候 (『帝国新用文大成』18才)

のように、文末辞「候」をとまわらない例が見られる。このような
「くべく」という例が見られる点は、今回調査した近世期往来物と
の違いとして指摘できる。⁽⁶⁾

三・二 明治後期資料の「くべく候」

『日本用文章』では、明治前期・中期資料と同様に「くべく候」
が多く用いられているが、そのほかの資料では「くべく候」の用例
数は、総じて少ない。また、大正期の往来物においても「くべく候」
の用例数は少ない。この時期の資料から「くべく候」は衰退に転じ
たと考えられる。

ところで、「くべく候」は、その衰退の過程において、用いられか
たにある傾向が見られる。以下、それについて述べることにする。

まず、ひとつめの傾向として「ご安心ください」という意の表現
で多く用いられているということがあげられる。たとえば、「くべく
候」が二五例用いられている『尋常卒業後実用作文』では、

小生方一同無事罷在候間^レ憚御安意可^レ被^レ下 (25ペ)

など、「ご安心ください」という意の表現での例が一四例見られる。

そのほか、『郵信用文』では七例中三例、『有益新用文』では一二例
中三例、『書翰文大全』では三例中二例、『高等作文独習』では一例
中一例が「ご安心ください」という意の表現での使用である。

ふたつめの傾向として「年始状」「暑中見舞い状」など、いわゆる
あいさつ状での使用が多いということがあげられる。用例を次にあ
げる。

猶折角御年仕舞可^レ被^レ成候 (『郵信用文』「歳暮の文」42ペ)
ビール一打御礼の印まで御叱留下さるべく候

(『書翰文作法』「暑中見舞の文」206ペ)

各資料ごとにあいさつ状での「くべく候」の用例数を見ると、『郵
信用文』では七例中四例、『有益新用文』では一二例中五例、『尋
常卒業後実用作文』では二五例中五例、『書翰文作法』では二例中一例、
『高等作文独習』『手紙講習録』では一例中一例がいわゆるあいさつ
状での使用である。

これらふたつの傾向は、すべての明治後期資料に見られるとい
うものではない。しかし、「くべく候」が衰退していくなかでの特徴と
して注意してよいであろう。

四 「くべく候」に代わる定型表現

前節で述べたように、相手への依頼を表す定型表現「くべく候」
は、明治後期資料では、衰退に転じる。それでは、「くべく候」に代
わって、どのような表現形式が相手への依頼をあらわす定型表現と
なったのであろうか。以下、このことについて見ていく。

まず、おおよその見通しをえるために、「くべく候」を多用する往
来物から『普通作文必携』(明11)、「くべく候」をほとんど用いない
往来物から『書翰文作法』(明44)をとりあげ、年始状の例文に見ら
れる依頼表現を比較する。その例文を次にあげる。

『普通作文必携』

新春之御慶万福申納候。先以貴下御安泰一層賀正仕候。次二拙
宅無異^レ憚御休意可^レ被^レ下候 (上・1才)

『書翰文作法』

表 6

		「くたく候」 (含「たく」)	「くべく候」 (含「べく」)
A	漢語文章大全 (5)	46	
A	普通作文必携 (11)	106	10
A	開化普通用文章 (14)	25	8
A	帝国新用文大成 (23)	34	28
A	明治作文三千題 (24)	30	39
B	作文独稽古 (28)	18	18
B	新撰注解用文 (29)	30	18
B	帝国新体作文 (30)	21	16
B	実益新用文 (32)	16	14
B	郵信用文 (32)	7	29
B	高等作文独習 (36)	1	44
B	有益新用文 (39)	12	32
B	日本用文章 (41)	154	118
B	尋常卒業後実用作文 (42)	25	41
C	書翰文作法 (44)	2	53
C	書翰文大成 (44)	2	13
C	手紙講習録 (45)	1	11
C	書翰文大全 (45)	3	82
C	書翰文講話及文範 (大元)	12	79
B	大正書翰文 (大4)	3	120

新春の御慶万里同風めでたく申し納め候。先づ以て御尊家御一統様御揃ひ御超歳被遊候段恭しく賀し奉り候。降て当方儀、一同変りなく馬齢を加へ候間憚りながら御安心下されたく候。

(99 ぺ)

傍線部が「く安心ください」という依頼の表現である。両者を比較すると、『普通作文必携』で「くべく候」と表現されているものが『書翰文作法』では「くたく候」と表現されていることが分かる。したがって、明治期往来物における依頼を表す定型表現は「くべく候」から「くたく候」へと交替したという見通しがたてられる。以下、この見通しを検証することとする。

まず、明治期往来物における「くたく候」の使用実態から見ている。今回調査した明治期往来物における「くたく候」の用例数を表 6 に示した。なお、「くたく候」には、

午後より御責臨被下度、迂生より参殿可致答二候へ共……

(『帝国新用文大成』40ウ)

のように「候」をとみなわない例(挙例傍線部・以下「くたく」と呼ぶ)が見られる。表 6 では、この「くたく」の用例数を「くたく候」とは別にあげた。表 7 には、「くたく候」の上接語とその用例数を資料ごとに示した。かつこ内の数字は「くたく」の上接語の用例数である。

表 6 を見ると、「くたく候」は『普通作文必携』から用いられているものの、明治前期資料では用例数がひじょうに少ない。しかし、明治中期の『帝国新用文大成』からは、用例数が増加していく。次に、用例をあげる。

御上京之日限御報知被下度候(『普通作文必携』上・41ウ)

目下甚差支候間只今此者ニ御返付被下度候

(『帝国新用文大成』100オ)

御任期満了致すべく、心丈夫に思召被遊度候

(『書翰文大全』217 ぺ)

「くたく候」の上接語については、表 7 から、どの資料でも「くださる」が多いということが分かる。したがって、たんに「くたく候」という形で依頼を表す定型表現として定着していたとするよりも、「くだされたく候」という形で定着していたと考えられる。相手への依頼を表す定型表現の変化は、上接語「くださる」もふくめた形の「くくださるべく候」から「くくだされたく候」という変化といえよう。

次に、「くたく候」と「くべく候」との用例数の推移を見よう。両表現の用例数の推移を比較しやすいように、表 8 にまとめた。こ

表 7

		あいなる	あそはさる	くださる	これある	なさる	る (らる)
A	漢語文章大全 (5)						
A	普通作文必携 (11)			5 (5)			
A	開化普通用文章 (14)			3 (5)			
A	帝国新用文大成 (23)			3 (23)	(1)		(1)
A	明治作文三千題 (24)	1 (4)		14 (17)	1	1	1
B	作文独習古 (28)			14 (2)			2
B	新撰注解用文 (29)	(2)		10 (5)			(1)
B	帝国新体作文 (30)			10 (6)			
B	実益新用文 (32)			12 (2)			
B	郵信用文 (32)			29			
B	高等作文独習 (36)	9 (17)	(1)	3 (14)		(1)	
B	有益新用文 (39)	(2)		5 (24)			
B	日本用文章 (41)	12 (5)		62 (24)	10 (4)		(1)
B	尋常卒業後実用作文 (42)			17 (21)	3		
C	書翰文作法 (44)	(1)		31 (17)		1 (2)	1
C	書翰大成 (44)			11			
C	手紙講習録 (45)			8 (3)			
C	書翰文大全 (45)	(2)	1	30 (43)	2	2	1 (1)
C	書翰文講話及文範 (大元)	1		64 (14)			
B	大正書翰文 (大 4)	8	1 (2)	89 (20)			

表 8

		くたく候	くたく
A	漢語文章大全 (5)		
A	普通作文必携 (11)	5	5
A	開化普通用文章 (14)	3	5
A	帝国新用文大成 (23)	3	25
A	明治作文三千題 (24)	18	21
B	作文独習古 (28)	16	2
B	新撰注解用文 (29)	10	8
B	帝国新体作文 (30)	10	6
B	実益新用文 (32)	12	2
B	郵信用文 (32)	29	
B	高等作文独習 (36)	12	32
B	有益新用文 (39)	5	27
B	日本用文章 (41)	84	34
B	尋常卒業後実用作文 (42)	20	21
C	書翰文作法 (44)	33	20
C	書翰大成 (44)	13	
C	手紙講習録 (45)	8	3
C	書翰文大全 (45)	36	46
C	書翰文講話及文範 (大元)	65	14
B	大正書翰文 (大 4)	98	22

の表では、「くべく候」「くたく候」も「くべく候」「くたく候」とまとめて用例数を示した。

「くべく候」と「くたく候」の用例数の推移を見ると、相手への依頼を表す定型表現が「くべく候」から「くたく候」へと交替していったことが確認できる。「くたく候」は、明治中期資料で「くべく候」と勢力がきつ抗し、その後、明治後期資料において「くべく候」と用例数が逆転する。明治前期からしだいに勢力を伸ばした「くたく候」は、明治後期には候文体書簡文の新しい定型表現としての地位を確立したと考えられる。

おわりに

以上、明治期往来物における「くべく候」の使用実態について見てきた。これまで述べてきたところをまとめる。

① 「くべく候」は、今回調査したすべての近世期往来物において用いられている。「くべく候」の上接語は、「くださる」がもっとも多く、この時期には「くくださるべく候」という形で、定型表現となっていたと考えられる。

② 明治前期・中期資料では、近世期往来物と同様に「くべく候」、なかでも「くくださるべく候」が多く用いられている。しかし、明治後期資料や大正期の往来物では、「くべく候」は、ほとんど用いられなくなる。この頃から、「くべく候」は、衰退していったと考えられる。

③ 「くべく候」に代わる定型表現としては「くたく候」が用いられるようになった。「くたく候」は、明治前期から見られ、中期資料で「くべく候」ときつ抗するようになり、後期資料では「くべく候」をしのいで、定型表現としての地位を確立した。「くたく候」の上接語については、「くださる」がもっとも多く、「くくだされたく候」という形で新しい定型表現となっていたと考えられる。

なお、「くべく候」が衰退した要因など残された課題も多い。後考を期したい。

今回調査した往来物の資料的な性格については、次のようなことがいえる。

明治一〇年代のA類は、「くべく候」を多用しており、近世期の規範をそのまま引きついだ資料である。しかし、おなじA類でも明治二〇年代のものになると、「くべく候」と「くたく候」との用例数がきつ抗するようになる。これらは、明治の新しい規範が確立するまでの間の様相を示すものと考えられる。⁸⁾このことは、同時期のB類

についてもいえる。一方、明治後期のB、C類は、新しい定型表現「くくだされたく候」をかなり多用しており、新しい意識のもとで編さんされたものと考えられる。

以上のことから、明治期における候文体書簡文の特色を明らかにするにあたっては、明治三〇年代以降のB、C類が重要な資料と考えられる。また、明治二〇年代のA、B類については、近世期の規範から明治期の規範へと変化していく過程を示すものとして、調査していく必要がある。

ところで、小椋（一九九八）では、明治期往来物五〇点の頭語、結語を調査した結果から、今後とりあげるべき資料について、

「拝啓」「敬具」などの現代一般的頭語、結語を多く用いる資料が、明治二〇年代以降に刊行されたA類、およびB、C類に多く見られる。したがって、これらを中心に調査を行なうといけば、明治期の候文体書簡文の特色を明らかにできる。

と述べた。このことと今回の考察の結果とを照らしあわせると、今回の調査結果は、小椋（一九九八）で述べた見通しとほぼ合致しており、小椋（一九九八）での見通しを再確認する結果となった。

今後、さらに多くの往来物について今回と同様の調査をしていく必要がある。そうすることによって、明治期の候文体書簡文の特色が明らかになっていくとともに、また、その調査の結果をフィードバックさせて、小椋（一九九八）や本稿で述べたことを確認、または補足、修正していけば、明治期往来物の資料的な性格がよりいっそう明らかになると考えられる。

注

- (1) 橘（一九七七）で福沢諭吉『文字之教』など五点がとりあげられているが、各資料の解題が中心であり、言語についての具体的な考察、資料的な性格についての検討はなされていない。
- (2) 橘（一九七七）第九章、第一〇章、小椋（一九九八）を参照。
- (3) 往来物には、男子用と女子用とがあるが、本稿では男子用往来物ととりあげた。女子用往来物についても、別の機会に資料的な性格などを検討したい。
- (4) 分類の詳細については、小椋（一九九八）を参照。
- (5) 往来物の書体と使用語との関係については、小椋（一九九七）ですでに述べた。
- (6) 明治期には、普通文的な要素の混入した候文体書簡文や「候而」「候間」などの接統表現の使用を避けた候文体書簡文などが見られるようになる。「くべく」という例が見られるようになった要因については、このような候文体書簡文の文体の変化とあわせていく必要がある。
- (7) 『日本用文章』における「くべく候」の用例数がひじょうに多い要因については、編者の規範意識の影響が考えられる。この点については、今後の課題としたい。なお、このように明治後期資料であっても、編者の意識により古い傾向を示すものもある。そのため、往来物を書簡文研究の資料に使うには、本稿のような調査を行い、資料的な性格を把握することが必要なのである。
- (8) 三二では、「くべく候」の用例数から、明治中期資料を近世の規範を忠実に受け継いだものとしたが、「くたく候」の使用状況を考えると、本文で述べたように、新しい意識をあわせ持つ資料と考えるのが適切である。

参考文献

- 小椋秀樹（一九九七）「明治期の女子書簡文における『参らせ候』の衰退——明治期女子用往来物を資料として——『語文』（大阪大）67」
小椋秀樹（一九九八）「書簡文研究資料としての明治期往来物」『論究日本文学』（立命館大）69
木坂基（一九七六）『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房
橘豊（一九七七）『書簡作法の研究』風間書房

テキスト 『文林節用筆海往来』（日本教科書大系「往来編」）筆林用文章指
南車『安永用文章』『注釈用文章』（以上「往来物大系」）

付記 本稿は、第五八回国語語彙史研究会（一九九八年四月二五

日・於龍谷大学）における口頭発表をもとにしたものである。

— 国立国語研究所研究員 —